
優しい思い出

星野 雫(Elwing)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい思い出

【Nコード】

N9749L

【作者名】

星野 雫 (E l w i n g)

【あらすじ】

同窓会の知らせを見て、思い出した高校生の頃の事、そして、その当時の想い。その事について思いをめぐらす。

マスクメロンさんが、そのホームページで出していたお題、『桜、雪、雨』で作った、お話です。

よろしくお願いします。

あの人と初めて会ったのは、雨の日だった。

おっちょこちよいで、目先の事しか考えてなくて、何度お母さんに言われても、その日の朝が晴れていれば、天気予報なんて聞きもしないで出かけてしまう私は、昼過ぎから降り出した雨に困り果てていた。

「あゝあ、どうしようかなあ……」

土砂降りの雨を見ながら、廊下で途方にくれていた時だった。

「ね、君。傘がないんでしょ？」

「え？」

突然、かけられた声にびっくりしながら振り返ると、あの人がいた。

「これ、貸してあげる」

そう言っただの人は、真っ黒の、如何にもおとこもの、って感じの傘を私に差し出した。

私が戸惑いながら、その傘を手にとると、少しの間、私を見つめていたけれど、踵を返して走っていつてしまった。

それがあの人との出会いだった。

その後、次第に膨らんでいく想いを感じ、あの人の特別な一人になりたい、何度そう願った事か知れないけど、あの人にとって私は背景の一つに過ぎないんだろう。あの傘だって、返すきっかけを作れずにとずっと持っているのに、彼は私の事に気が付きもしない様だった。

傘を差し出した時の、あの人の、真っ直ぐな瞳を、それでいて、戸惑っている様な、困ったかの様な視線の揺れを、今もはっきりと思い出すことが出来る。そして、その戸惑いを私の好いように考えようとしていた私を……。

それでも、何の勇氣も出せなかった私は、何も言う事も出来ず、
そうこうするうちに、結局あの傘は全然別の友達に見つかって、そ
の友達経由であの人に返却されてしまった。

話しかける理由を失って、私は何のきっかけも接点も作れずに、
ただ、あの人を遠くから見ることにしか出来なかった。

そんな日々を過ごすうちに、想いが強くなるのと同時に不安も大
きくなっていった。

それでも何の勇氣もない私は、何も言う事も、する事も出来なか
った。 そうするうちに雨の季節は過ぎて、夏になり、さらに加速
する年月は、あつと言つ間に過ぎてしまった。

卒業式の日、あの人と同じときをすごせる最後の日、咲き始めた
桜を見上げながら、悔いを残さないためにも告白しよう。 そう決
意した。

いえ、したはずだった……。

けど、いざとなると、最後の一步を踏み出せず、何も言うことが
出来ないままに、その日を終えてしまった。

それは今となつては、多感な頃の、切なく真剣な、それでも幼い
想いの思い出だった。

けど、告白できなかった、想いに行き先を与える事が出来なかつ
た。 そのもどかしさは、いつまでも晴らすことが出来ないように
感じられた。

カーテン越しに、ちらつく雪を見ながら、そんな高校生の頃を思い出していた。

「おまえ、今度の同窓会、行くのかい？」

夫の、その唐突で、それでいて、たった今思い出していた事に重なるその問いに、私の追想を見抜かれたのだろうか？ などと想いながら、それでも微笑みながら振り向いた。

「そうね、十年ぶりだし…、でも…、どうしようかしら…」

「どうせ地元なんだし、行けばいいじゃないか、俺は行こうかな」

「あら、お目当ての人でもいるのかしら？」

「おいおい、なに言ってるんだよ。 おまえ以外にいなかったのは知ってるだろ？」

「あーら、本当かしら？」

そんな風にじゃれあいながら、久しぶりに高校生の頃を思い出して、二人でひとしきり話し込んだ。そして私たちは二人揃って同窓会に行く事にした。

同窓会当日、久しぶりに会った高校の同級生は、みんな変わっている様で変わってない感じで、とにかく懐かしかった。

けど、私は密かに怖かった。

あの人に出会ったのが、そして、出会ってしまった時に私が何を思うのか、が…。

そんな私の想いを知ってか知らずか、夫は何故か含みのある様な、それでいて、どこまでも優しい微笑を私に向けていた。

そして、私は恐れていたその人を見つけてしまった。十年ぶりに見るあの人は、やはり変わっていた。それでも、はつきりとあの人だと分かった。

あろう事か、あの人は私を見つめているようだった。

私と目が合うと、あの人は穏やかな笑みを浮かべ、私に向かって

近付いてきた。

「久しぶり、だね。　って僕のことを覚えてる？」

「ええ、覚えてるわ…。　高校二年の時、突然の雨の日に、傘を貸してくれたわよね？」

「良かった。　覚えていてくれたんだ…」

「ふふ。　すぐ助かったもの、忘れた事はないわ？」

そう話しながら、まともに会話するのは初めてだと気がついた。

「僕もさ。　で、今さら、だけど。　あの頃、僕はきみが好きだったんだよ」

その突然の告白に、私は微笑む事が出来た。

「あら。　ホントに今さらね、でも、おしかったわね」

「え？　　どうということ？」

「私も、あなたの事が好きだったのよ」

続く数秒の間、私とあの人は、お互いの瞳を覗き込んでいた。けど、十年前のあの雨の日に感じた戸惑いも、揺れも感じられなかった。

私の心には、ただ懐かしい光景が浮かんでいた。かつてその光景と一緒に感じていたはずの強い想いは、もどかしさは、今は淡く、優しい記憶となっている様だった。

そして私は、はつきりと感じる事が出来た。

この人を想って過ごした時間は、貴重な、手放す事など出来ない私の一部だけど、私の一番大事な時間は、夫と共に過ごした時間だと。

あの卒業式の日、とうとう私は何も出来なかったけど、夫は私に交際を申し込んでくれた。

あの人の事が心の大部分を占めていたけど、友達からでいいからという夫の言葉と、私を包み込むような笑顔に、何かにすがりたかった私は、卒業後も連絡しあう事にした。

その時から積み重ねてきた時間こそが、今の私にとっては、一番

大事な時間だった。そして、その時間をこれからも積み重ねていくことが私の願い。それをはっきりと感じた。

「じゃあ、またね」

「ええ、元気でね」

そう言葉を交わすと、私は振り返った。

そこには夫がいた。私を真っ直ぐに見つめて、優しく微笑む一番大事な人がいた。私も微笑むと、夫に向かって歩き始めた。

寄り添うために、微笑みあうために、時には喧嘩もするけれど…。

ずっとずっと、一緒に歩むために…。

（後書き）

何だか、微妙なお話のような気がします。それでも、優しいお話に出来たかな、と思っています。昔を懐かしみ、昇華できていないかも知れない、恋の想いに怯える、それは、今の想いが大事だから、それを感じている時点で、以前の想いは昇華されているのだけれど…。それを実感できていなかった彼女は、今の幸せを壊してしまう想いを抱えているのではないか？という幻に怯えています。そして…。

多分、よくあるお話だとは思いますが。
感想等頂ければ、たいへん幸せです。 よろしくお願いいたします。
す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9749/>

優しい思い出

2010年10月8日13時40分発行